



卯辰
卯辰
卯辰

卯辰



西華儀平之生

賦類

本朝文鑑才二

硯賦

既調生賦

涼賦

將暮賦

讀將暮賦

日和山賦

悠然賦

好色賦

行類

水波行

萬歲行

吟類

雨夜吟

曲類

於曲

田舍曲

東曲

舞子曲

こゝろとてゝもあはれけり月とてなれり
ひらけりしやうとてあはれけり月とてなれり
こゝろとてゝもあはれけり月とてなれり
ひらけりしやうとてあはれけり月とてなれり

紅云此賦ハ文章ノ趣ミテ始ハ子西カ壽文ヨリ中比
ハ雪ノ文字ヲ云イ終ハ石ノ人ノ文字ヲ云イテ全篇
硯ノ字ヲ顯ハサセ等ヲ隱見ノ格ニシテ倭文ニ一体ノ
奇絶ト稱スシ然レニ壁中ヲモトミル前後ノ通續ヲ辨ハ
ス但シ源氏ニ玉夢ノ蛭ヲ云ルニヤ知ラス去ハ此表ハ北村公

ニシテ其言ニテ字ノ各ヲ稱シテ始ハ洛ノ新玉津嶋住シ後ハ
云祿ヲ得テ武城ニ官仕ス歟書ノ抄物モ數多ナリトフ

既望賦

芭蕉庵

月のおもひあはれけり月とてなれり
月のおもひあはれけり月とてなれり
月のおもひあはれけり月とてなれり
月のおもひあはれけり月とてなれり

狂云此賦ハ誠ニ瀏亮ニシテ全ク賦体ヲ尽セリト云云ハ
 鏡山ノ一節ヨリ古詩ニ月ノ云々ヲ言セテ此ニ直ニ夜
 主振ラ云々古詩ニ玉塔ノ喻ヲ借テ千斛仙ノ名ヲ添フ
 カモ故更古詩ノ用イ所ハ此等ノ摘採ニ知レキヨリ本ヨリ
 先着ノ文章ハ抑子庵ノ遺稿ニモ數多キコトハ或ハ湖東
 ノ文選ニ入り或ハ門下ノ俳文集ニ出テ今ヤ再選スルニ
 凡ハス弊言ニ而論ラ見ズストモ此ニ一篇ノ趣意ヲ見テ此ニ一篇
 ノ虛實ヲ知ラハ和ヲ思フモ又ニ明カニ俳諧ノ理ヲ
 含ミ明ナラシムルハ世ノ詞ニ入カリテ歡楽中ノ哀情
 ヲ忘レルハ例ニ樂ニテ淫セスヤ斯云羽ニ於テ斯文アリ
 三六

涼賦

渡吾仲

洛陽のふと川ありて上と下と川といふトと云川
 と云ふ云々云々ものふ川や坪のふ川ともふ川に
 ふれい年々この六月七月十八日のあはれみま
 の橋のこゝろより之条の橋と云ふはては川
 のふと云と云一橋と云ふの坪と云ふのふと云
 といふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云
 といふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云
 といふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云ふの坪と云

見せし一列よ金のめだいの事の中より抑ひて
 いふとみのおふりききも傳はる所の事なり
 名利の向ふとて置たりやそをのりふとてされ
 きりやそれとれ子のよの事よもあつたおと
 あつたいふ事居のりよふとていふ事居の
 けりそふとていふ事居のりよふとていふ事居の

狂云世跡は縦横無碍ニシテ始ハ王城ノ代ヲ祝シ中ニハ
 帝京ノ花美ヲ顯シテ終リニ遊人ノ哀ホラセハ誠ニ長安ノ
 名利ヲ觀シテ然モ長安ノ名利ニ遊リ或ハ時ハ風景
 ニ和テノ文法ヲ交ヘタル或ハ家名ノ批訂ニ浮世草紙ノ

筆格ヲ用イタル或ハ河草ノ常物ニ長短ノ對ノ賦体ヲ尽
 セル總テハ能讀ノ筆格ヨリ新古今ノ風ヲ合成セリト云ヒ
 況ヤ儒仏ノ高論ヲ擧ケテ其レヲ結語ノ輕急ナル言
 文章ノ虛實毎ク傳ヘテ洛陽ニ作者アリト稱スレ但シ
 世即ハ渡部氏ニノ別在ラ抑後園ト云フ事ヤ人ハ標字ヲ

将基賦

東花七坊

象戯と垂鰭のあつととてきりてけふふとて
 とふいふ張陣の法ありて盤上と智恵とを
 かゝむ國よ王の仁あつたふと忠臣の義あつた

や勝るべしとの運ふくも上より下への運を
多くしきく馬廻の法よりいたるいかに
厚本^{ヤニキ}片^{ヤウラ}標^{ヤウラ}し金銀標香とハよきとてた
と角行と軍師の位あり一いしを置し張良
あり富し孔明ありくもさ諸軍とて一たの
ト知しきくもさふのありしを銀将の
諸卒ありて敵の城中より入る時をさし一を
ゆく金将の位とありきと将軍の勸告と
ありしなりさきそ^{メテ}摘^{メテ}の羽とありてさきと
諸將とありし敵陣とありしとありしとありしと

とけふ角行とくし馬廻とけふ二騎を彼が訓練
しきくたの敵下の常力士とて一しはてた
居る事ありや向る事あり中なる事い法の事
とあり中央と銀角のありしありしとむ二
一兵の位あり兵書とありしと法ありしと
なくしけの法とありしとあり或は中なる事
のありしとありしとありしとありしとありしと
血条とありしとありしとありしとありしとありしと
標とありしとありしとありしとありしとありしと
とありしとありしとありしとありしとありしと

其味方大将と討つ馬の足まのまゝなり
 不意の敗軍よりありけりやと釣のり罷
 亂のまゝありけりやと釣のり罷
 此れあれ敵軍より入て王のやうとありけり
 けりけり極馬とくれけりけり銀とけり極馬
 金とけりけり極馬のけりけり銀とけり極馬
 もめとけりけり極馬のけりけり銀とけり極馬
 此軍の軍術ありけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり

されけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり

副憶ふ保えの軍とありし軍師のに勇う、章武の
詔とく、こゝろに、我国のあり、あつても、あつて、
て上と、だ、う、よ、車、の、あ、と、あ、て、中、段、の、あ、れ、
あ、れ、の、を、輔、て、あ、い、角、り、の、あ、れ、の、あ、れ、
や、う、て、僅、楚、の、風、流、を、張、良、の、諫、を、一、次、に、金、將、銀、將、
と、園、羽、張、を、異、見、も、あ、う、て、武、獨、公、平、り、力、ま、
と、金、の、宗、成、の、憶、病、を、お、く、に、難、し、の、よ、う、宗、耀、の、
び、り、り、銀、の、韓、信、の、勇、氣、と、さ、う、あ、れ、諸、卒、の、頭、
の、武、衛、の、名、と、つ、て、こ、ろ、に、官、録、を、あ、う、や、う、
の、今、も、た、い、の、人、に、い、や、う、あ、う、や、う、て、体、を、あ、れ、

あ、う、て、体、馬、を、張、楚、の、解、あり、て、堀、と、越、の、武、勇、
さ、う、と、軍、の、よ、う、に、林、の、名、言、を、い、や、う、て、免、
地、の、あ、う、て、以、逸、待、つ、か、う、に、兵、を、あ、う、に、人、の、退、
い、わ、る、の、戦、言、を、い、や、う、に、或、の、角、り、の、あ、れ、
と、あ、れ、の、二、よ、う、に、章、と、あ、う、に、或、を、解、と、あ、う、
の、あ、う、と、か、う、に、人、と、あ、う、に、い、や、う、に、軍、の、あ、れ、
う、り、と、あ、う、に、今、に、あ、れ、世、情、と、あ、う、に、一、儒、の、あ、れ、
よ、う、に、あ、う、に、師、の、八、教、と、あ、う、に、い、や、う、に、将、の、あ、れ、
あ、れ、あ、う、に、和、平、の、情、と、あ、う、に、い、や、う、に、い、や、う、に、盤、の、
あ、れ、い、と、う、に、人、の、あ、れ、と、あ、う、に、い、や、う、に、竟、帝、の、あ、れ、

それとて一これより人の心とていふも、
し刻勝の人と勝つていふ事と別なれど、
服遠の族^{ヤカラ}を思ふる念作とトは、いふやうに
る冷きとるくは、いふ事とていふ
く、世といふ世の心、いふ事とていふ
駒といふ駒の情とていふ、いふ事とていふ
とる遠く大般若の真諦とていふ、いふ事とていふ
の世諦といふ事

任云此の篇ハ前賦ノ註チカラ委チク故更古語ヲ解スルニ
文ニハ句對アリ意對アリテ體ニ賦體ク骨成セリ誦ニ

應用自在ト云ハ此ハ前公ハ傳類ヨリ云々モ讀ハ一
ヲ讀ミテ然レハ此ハ篇ノ趣ハ殆ニ是レ也節ノ二よりテ和漢
五般ノ情ヲ喩ヘ儒仏ニ貫ノ理ヲ達ニ或ハ云云起リ凡
輕シトハ孟子父ヲ辱ミテ其ノ辱ミヲ擯シ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ採リ
或ハ保元章詩トハ和ニ信賴ノ敗軍ヲ云々漢ニ孔明ヤ出
師ヲ云々但シ先帝崩御ノ年ヲナラン或ハ関羽ノ對ニ
和漢ニ智勇ノ西エラズイナトラ異見トカ味トハ互見ノ法
ニレテむも最畧ヲニ事タリ増シテ字成四ニ韓信トハ
金銀ノ情ヲ青貞ニシテ文ニ章ノ風情ハ云々知レシ或ハ亮
ノ對ニ其レヲ教ヘハ其名ヲ云々テ是ラ爲トハ將其云

元をも隠見ノ法ナカラ其是ノ二子ニ云フテ世等ハ奇
絶ト称スレ然レニ結語大般君ハ十將集中將其ト云フ
ヨリ摩訶大ノ子ニ歸意ヲ示ル世等ハ當意即妙トモ云
シ但シ野航ハ四々義中ナルヤ別姓ハ村瀬ニテ濃ノ山縣ニ
住ス蓮ニ房ト從才ナリ

旧和山賦

山岸昨右長

溪ノ北山ト云ふを序ノ風雨の憂とスル眼裏
くくくんとせふれに世の如く山といふこと何川と
帯ト一ね五反田と稱ト一サるべきものなり

とありて白雲と云ふのまはるるに云ふに山といふは
ありて海と云ふと一海とありて一林扉とありて
ありて市店とありて一ありて南と金風とありて角靜
の聲といふ一北と月雲とありて入るの聲といふ
のまはるるに觀音も多ふの標なりと云ふありて
北と南の如くといふや一吹やと北と云ふと
西南と云ふとありて北の如くといふと新羅
の月と云ふとありて北と云ふとありて
いふと云ふとありて北と云ふとありて
北と云ふとありて北と云ふとありて

行類

水波行 五言

山岸昨有表

三國の北二里くく大澤山の林下へ海曲ありて所と
 東尋嶺とて世に傳ふ所は天らの比のくく
 室のや泉を此家遠かりと其性ふゆ暴德
 てその所とあふむふその徒とかもさ常へ海ねと
 業しとりは師等とてくれえとくくといふ
 ころむむとくくにあふるのるるくく
 大いふ海よりくくくくくくくくくくくく
 あれはけう怒るる此海曲くくくくくくくくくくくく

五里くく風あふくばきくくく西海小澤のりくくありと
 のきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 おうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くの所ありくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 くるくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 命くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 じくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 一念の風くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

祝し或ハ鷗ニ照ノ子ハ照鷗ノ倒将ナリ或ハ逢坂ニ鷗自ハ鷗ノ
 虚ヲ令セテウヤムヤノ角ハ臺字ノ縁ナリ或ハ桎鳥ニハ
 西行ノ子ヲ備リ奉袍ニ東坡カ詩ヲ寄セテ例ニ和漢通
 ナリ或ハ東坡カ布穀ノ詩ニ勸我服布袴トハ其鳥ノ鳴音
 上ハ多ニ奉袍ト云イ上タルナリ或ハ三平ノ名ラ云ハ御所
 万歳ノ詞ニ難波曲トハ酒ノ名ナリ然レハ聖俞カ四含内語ニ
 提在盧沽美酒ト啼ク身ハ日本ニ糊搥ノ類ナリ啼トハ
 和音ノ詞ニ寄セテ鳥ノ俗語ヲ變タル多ニ文章ノ虚實ヲ
 凡レ或ハ團扇ニ柄トワケ而チ鳥ハ嘲物ノ扱ナリ浮子鳥
 ノ凱カクナリ總テ万歳ノ詞ニハハルトツメルトニ用ナリ或京

吟類

雨ね吟

佐呂文

タイラトハ平安城ノ子ヲ云イテ多事桐ハ當時ノ法紋ヲ市ノ
 三垂却ノ早言ニ效クテ多ニモ雲云ルナリ或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ
 平ノ子ニ洛陽ヲ祝シ松ノ子ニ武城ヲ祝シテ尤モ子歳ノ
 カケナリ或ハ千年ノ祝トハ諸カ歳ノ結語ニヤラタノトハ舞
 收メスラ令ハ市ノ法制家ニ寄セテ家ノ庭電ヲ祝イタル誠ニ
 同出年万歳行ナルレ但シ華表人ハ我師ノ隱名ナリ又法奇怪
 ラ憚テ多ニハ丁零カ鳥ヲ云ルナリ

ひうたよりとねれど
 ねて 雨ふと神とやをねる。

ヲカケテ春秋ノ詞ヲ覽スルニ等ハ隔句ノ意對ニメテ此篇ノ奇
法ヲ稱スレ但シ第^ヤ屋ニ寄ラ讀ム古人ノ體アリ尋ニ誠ニ
吟ノ一休ハ整ノ声ニ喲テノ自^リ更^ニ沈思ヲ云テハ杜陵ハ我ノ愛^{イハ}
嚮キヲ歎キ耳又秋子ノ行事ヲ思ハル則チハ起即チ更^ニテ
喲ナルニ然ルニ破ノ月ヲ以テ圓ノ一子ヲ云テ足結語ハ題名
ノ後子ヲウ^ニ沈吟ノ情ヲ盡シテ鳥^ニ玉^ノニ子ノ無用ヲ知ラ
ニ但シ作者ハ徒野中ニシ美濃ノ角ニ遊放ス蕉^ノノ名^ヲ

曲類

和曲

二五章

作者不知

一やとみらるゝのゝのれとふもちとていふ

る月を

吾のこやののあまのゆー　　やうあまの
のの

狂云此二章ハ古キ唱^ヲナカ^クノ^ニ曲^ノ又鑑ニ出セルナリ云ハ
二則三章ハ古今佳^キノ實アリテ月ヲ以テハ三章ノ花ナル後三章ハ
新古今ノ花^ニミテト^ハ深^ニ六牧^ノ牧^ノカ詩情アリテ床^ニ敷^ト思^ヒヤリ
スルハ一章ノ実言所ニシテヤ^リ店^ノ鶏^ノノ^ニ情^ヲ覺^スナラシカ

田舎曲

作者不知

市を歩く　　さうゆ　　歸のまゝふりあふ

や花はくくもなひのけくもあつてもしはのや
とふんちも人ともなれるのほふもいふて
師のふれもまゝもやせとあつた海の時を
かゝとせとあつてはもやせとあつてまゝ
ふれふれいとおや後のふれもいふて
花ものいふれもあつたふれもいふて
もいふてとあつてはもやせとあつて
後れいふてとあつてはもやせとあつて
おふれふれ月の月とあつてはもやせとあつて
男と花後のふれとあつてはもやせとあつて

ねふ曲に休にレテ金^金五十八句なりまは行^行事もナキ早^早賤^賤
者^者娘^娘ヲ舞^舞子ト云フ者ニヤレキミテ大^大名^名公^公家^家ノ宝^宝を安^安ラ
待^待ツニ如何ニ定^定ナキ世^世ノ無^無事^事ヲスヤト暫^暫ク且^且子^子ノアタナルヲ
云フニ似^似テ實^實ハ其^其親^親ノ情^情ナリ及^及ハ又^又空^空ノ月^月ヲ望^望ムニ多^多クハ
鏡^鏡ノ光^光ニ注^注テ思^思ハアヤレキ尼^尼トモ成^成ナシ去^去ルハ音^音ノ舞^舞子^子ヲサニ
今^今ハ都^都ノ歴^歴々^々モ舞^舞子^子ヲ其^其業^業ニ注^注ルニ何^何事^事ヤ娘^娘ハ其^其師^師ヲ取^取リ
テイト指^指櫛^櫛モサ化^化ヤカニ舞^舞子^子ヲ臆^臆ニサセタル事^事師^師ノ時^時世^世舞^舞子^子ノ嘆^嘆
息^息セルナリ去^去ルハ舟^舟コギ日和^{日和}見^見ルナト云^云キテ其^其通^通行^行ノ様^様モ
細^細手^手ニ渡^渡リウラテトハはやく後^後ノ所作^{所作}ナルヲ舞^舞子^子ノ愁^愁ニ喟^喟
タルナリ或^或ハ袖^袖ニウラ忍^忍トハ如何ナル公^公負^負家^家ニモ上^上婦^婦テ父母^{父母}ヲ

孝養し世ヲ竊ニ過キヨリ或ハ流モ因スヤトハ一ニ申中ノ
短詔ニシテ君見スヤ君因スヤノ例ニ古學府ノ常詔ナリ然レニ
我子ヲタキテハ猿抱子^{タキテ}帰^ルニ青嶺^{タキテ}後ト云ル古詩ノ意ヲ
因スヤト舞子ノアトナキヲ諫メシナリ但シ世ヲ忍一以下ハ云ニ
抱子ノ向^ニヲ按キテ例ニ委吉ノ曲ト見ル一況ヤ柳ナキニ雲拂ヲ
對シテ佳者ノ名ニ居ラヨリ疎^ニ某ノ安キニ眠ラシト先賢
ノ詞ヲ取言セテ朝ニ暮四ノ世ノ様ラ云ル世等ハ和音ノ文ニ
ヲ傳ヘテ世ノ采ヲ落ニ教誡ヲ志シカル誠ニ天地ノ情ヲ動シ誠ニ
鬼神ヲ毛^ニ泣シム一

本邦文鑑第二

引類

富士引

手羽引

謡類

雨乞謡

石搗謡

辭類

風俗辭

山姥辭

艶詞

戲仰辭

嵯峨子辭

夕暮辭

鳥返辭

歲類

雨居歲

猫恋歲

引類

富士引 并寄

山部赤人

あめけらのまねけ けしきさいてさくくわに駿河の
けのさねとあまのふりさげんわさるにれ歌も
かくろいてる月のさよふしあやもわゆるいはら
けくけをさるやうにわさるにいはらゆるむ
ふらふのさるねと

臣子れ浦よりしるしるねるまのさる

けのさねとあまのふりさげんわさるにれ歌も

ね云引ハ諸所ニ分明ナラス去下詩騷ニ似タ物ヲ序引ト

系テ註シタル引ハ決テ詩寄ラ後ニスト云元題註ノ字義ノ
急ナラン故ニ詩人玉屑ニモ始末ヲ載ルヲ引ト云テ彼ハ詩引
ト系ヘ註セリ然レハ万葉ノ題名ニモ山部赤人ニ至ラズ
歌一首 短寄ト云ハ時ハ五明ラ体トシ後ヲ用トセリ去レ
長短ノ差ヒアリトテ同シ寄ラ二首ツラ子テ系ハ歌トハ如何
強テハ長短ノ寄ニ首トハ云シ言ハ長寄ヲ引ト云テ短寄
ヲ後ニサセル時ハ誠ニ本朝ニモ引類アリテ是ラ古今ノ文鑑
トナサハ選者ニ一部ノ眼力アリト称スレ況ヤ結文ノ詞ラハ
云々行ニ富士ノ山ト次ノ短寄ニ云々サケタル不思議ニ序
ノ両格ヲ二首ヲ和漢冥合ノ引ト云シ

東也端

和云此引八名、説ナクテ詔路ニ長短ノ拍子アルナリト云

般它珪和尙

うねりさへやるをみてもたふあふくし強き

の言辭とちうかきくこれおろしき言の音韻
 と通ともくは漢文の辭類と武帝の秋風と如し
 つらふ六朝一叶のあそびの中より詩意とて騷とあり
 騷とて辭とふれ騷の意なりとてその辭の意
 いかんわづかに神師のこゝろあり物とてきい
 とも悲しくありてあつちの神のさういふに二
 意とてその一語あるは五七のけいありて詩の式も
 ふうとてきくむきの風情とさねいふなりあつち
 仲ふれなり漢の帝は秋風と起あつちも騷と云へ
 られ何の格とてけいありとては騷とては騷

といふかきかたの船とてや群臣のあつちて是は騷の
 辭の子とあつちなり——けいなりとて騷の意なりけい
 まくの訓解あるは騷類とてその辭とて
 けいなり字訓のけいなりけいなりとて騷とて
 此なり詞ありてその騷なりとて微情とてや
 或い言句のふりてつて或い文式とて騷の情深
 詠騷いと綴つてよとていへやとて騷のけいなり
 とつていへは騷のけいなりとてけいなりとて騷
 のるにけいなりとて騷のけいなりとてけいなり
 といふなり記あり伊勢物語の詞けいなりとて

の臨北^レ行^ニうへ能^ハ言^フのそや物なれも此よりあん
あうあういふまゝいふ事なりとるる所なり詩賦言行のみに
ありしめはあつたにせよ本家の作といへりやあ
の辭ともある所に人の國の註者ともあられた神あの
久春よりあらねばをあらぬふち家の丘あんに
師師に就詞とせり然てしてそにけおの中書王
にも整々落詞の一格あれば又も風俗、辭二章にたり
これの風俗ふんやとねの意よとわねてけ辭と
けけ一節り遠く之平君世の詞とあらねと近
く余遠波の辭とあらんと

ね云北一室ハ辭類ノ註解ト見レニ此知ニ楚辭ト云付ハ
 楚國人ノ詔音ヲ字セバ辭類ハ固東ニベイト云イコダト
 ミイ都ニサシセ氏アンス氏助諸ハ國々ノ風俗ナリ去レハ序
 モハ辭モ句讀ノ長短ヲ調ヘテハ詩賦ナリ行ノナラス
 此七題ノ外ニハ格ヲモテテ諸ク文類ヲ漏ラサレナリ
 去レハ須城ノ詞ニハワシモテモ彼カ平話ナラハ使ニルト云イ
 辭ニカルト云ル例ニ風雅ノ志ニナルナリ次ニ馬士ノ詞ニ錢案
 名ヲ彼カ風俗ニシテナラハ佳ト云イニナラハ固ト云ル例ノ
 一字ハ例ノ風雅ナリ或ハおとしモ無ク又トハナラシナラ又ト
 云フ又ナラホツトワメスハ助諸ニ此ナラモ去レハ此モ云ニ知
 (レ)

山姥辭

一休和尚

ぢぢ〜山姥をよあしをよあしをよあしをよあしをよあしと
 ぢぢ〜山姥をよあしをよあしをよあしをよあしをよあしと
 一休和尚の云ふところありて目ふまふなり邪正一如
 と云ふ時を色即是空とのやに佛にあらむ世に
 あり頗悩あらむ善提あり佛にあらむ世にあらむ世に
 あれど山姥にあり佛にあらむ世にあらむ世にあらむ世に
 何人何人あらむ世にあらむ世にあらむ世にあらむ世に

けさうひさききふに酒とく一日のあはれといふと
まゝにふく時とありあはれに職場のいとしき
雲入て花のうらみさうり紡績のたねを
とく人とききとくうらみの時の目とくわ
とく人のうらみとく解のかたきとく
まをとおるの月とくわくうらみの人ときき
も子あふ方とく此とくわくうらみの人ときき
いとわねやとくわくうらみの人ときき
いとわねやとくわくうらみの人ときき
いとわねやとくわくうらみの人ときき
いとわねやとくわくうらみの人ときき

狂云此世ハ世ニ知レ詠ナカラ例ニ我師ノ論ニ任セテ愛ニ辞ノ
一字ヲ叩フ去レト而耒ノ詠ヲ指シテ辞類ト云ニアラス詠ノ
中ニ此類アタナラシク云ハ山姥ノ冊ハ一体和尚ノ作トヤ
世ニ普ク云イ傳ヘテ古今ニ希有ノ文法ナリト誠ニ忽然
念起リ諸法皆空ノ道ヲ示シ魔仰一知ノ理ヲ顯シ
テ抑ハヒトリ花ハ紅ト同前ノ境ヲ云イ尽シタルニ色ト
云ハ結前生後ノ歸キアリテ抑人向ト文ヲ鍊スル仏理
ニ通セスハ一体ニ凡シク文学ニ達セスハ一体ニアリ
況ヤ花ニ依リ月ニ理ト文章ノ透向ニ鼓舞ヲヤセル度
モ同テ感ス手設ナリ但シ詠ヲ辭トハ語路ノ長短ニ知ルキ
ナリ

テ余所ノ恨ヲ負フニシクハ永ク世ニ在リテ添ハントハ如ク
スカセル詞モアウ入好色深妙ノ本情ナルニ^{ウツキ}近頭玉トハ
寸心ナラン去レト愈モ角モイ^ウ玉ハスト云所ニ枕^ニ紙ト
深中トノ浅深ヲモ知レキナリ誠ニ其客ノ膝枕ニ盤石
ヲ以テ押スカ如ク深中モ立カ子給^ルハ筆力不忠誠ノ
艶詞ニシテ此間ニ甚深ノ情ヲ汲ムレシ

戲仰辭

烏丸芝蔴

善福と此所を二碑とす。一箇は覆金の
の鑄像より多田新倉と濡仲の所傳より

此のく、五臓のわづらひ、あやうに南にありて
 御を十却のふゝと、賢とさう、はふゝと、
 ひのち、いゝあり、いと、あま、世、あゝ、
 撫、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、
 五、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、
 東、通、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、いゝ、

秘辛ふつとるきふかられ
 ちし秘とちしきふとん
 りと辯證の縁としふしきふとん
 とちしきふとん

狂云此篇ハ元ノ廣郷ノ有馬ニ入湯ノ村ノ筆下右ノ表
行次ニ書傳ヘテ見所ノ誤モ有ルナカ然レ此ハ篇ノ題名
結文ニ綺語ノ二字ラ見ラ此ハ字ヲ以テ題セシカ中間
ノ首ラ辭ト見レハモ古文ノ漁父辭ニ似テ前後ニ
序詞ノ文勢アレハ此等ハ漢家ノ辭ト云ハシ但シ此郷ハ
和歌ノ家ナカラ此等ノ字格モ遊ヒ玉ヘシ誠ニ文法ノ
疎カヨリ虚實ハ自在トハ稱スレ

情捨子辭

芭蕉庵

駿河の國より川をちりり二河をちりりちりり

あねもまゝにありいさやけ川のふ所へかきては世
の世とまのあふさうしてあはくらの命をふに
まゝとまゝにまじわて秋風とてや
しらんあふやまわれんと秋より渡りてふ

猿と人の子は所為心多

いゝや、はなをうまへるゝはなを母に
きく又をはとらむよあふも母をはとらむ
あふも所をねたうしてはなをねてゐると
あけ

狂云此辭も漁父ノ反歌ナラ推子ニ秋ノ風イカニト
向ヤケテ如何ニツヤト序詞ニツケタル但レ辭ノ體ノ一休
ニ

倭文ニ辞ヲ立ル時ハ千般法格足レシ誠ヤ富士川ノ瀬ヲ
浮世ノ波ニミイカケタル此川ナラテハ更ニ知レシ小ニ秋ヲ露
ハ深クノ奇ヲ備リ父母ノ情愛ハ莊子ノ天性ヲ云レ例ニ
和漢ノ博達ニテ是ヲモ漢家ノ辞ヨリ倭文ノ助語ヲ用得ル
ト云レ

夕暮ノ辞 并序

東老坊

いゝ一海あり湖ありの人と送ると武江ノ世本行の
ふとおゝうら東いぢふ人ありてけ別とわくは
おあにや海よはの人とけ人ノ心今やの心を新所
ありはなむむいゝう遠むむいゝあう唐土ノ一海あり

て詞とりて送る人ととらむ然とりて送る人とやむ
そのそらとて新あふ人あふやけりてその詞のや
ふあむ然あふ人のあふれとけいふあふむむ
いゝ旅あふあふ人一針の僧とてやて上高の旅
妻子とてとて家禄の人と家名とてとてとてや
あうて新旅あふあふ人あふいゝけりてあふいゝ
のし春秋あふいゝけりてむいゝあふと武土の旅
けけらけりて今あふまむ軍とてけりてあふ
あふいゝあふの命とてあふいゝあふいゝあふ
あふいゝあふとあふいゝあふいゝあふいゝあふいゝ

おやけのうにまつて武陵百里の旅とあやむき
 ちき言つれうとぬいけしひふさうにひまはうと
 あとくくけけのなふとこ秋とくおの月と
 二百里のおね人のやめとまふの月と
 ちて越路の園と命とぬいぬ人あふんやめふあめ
 ひ人をめつて梅のて子とわくよ花坊う人をも
 こそよ支梅の説つて梅のむのなとこそつていふや
 ち梅のに南とをけとあつ風和とを酸の味と
 馬祖と危倒の客と重とつてんへとつてけのふ
 とつてゆ年誰とともとやうあんと梅園とよと

角よりあふ出づてぞめれ田の秋あけのころより
 帯よりいひの縁もようけのさへりよふあふとけり
 光り西に夕日とけりすも遠とけりて一年より
 望みてよれいナ月山ニ月師をの月とて月といふ
 て日月の月とて節月とけり中略あふとけりあふ
 うらばらちくさむとけりあふとけりあふといふ

狂云此章ハ正月ノ祝詞ニシテ鳥追ト云者ノ農民ハ
 フミイアリク啼きより其者ハ育シ詠経者ト云テ逢坂ニ
 解凡ノ流ラ及テニ井ノ近松院ヲ本寺トセリト今依羅
 ト云者ナラン然レニ此ハ偏ノ分明ナラス早凡ノ者ノ習ハ傳ヘテ

鳥追馬ノ詔ニアラテセミ云フ武蔵坊弁慶シシボヘシ
 ト句讀セル如ク口授ノ違イ多クラン去シト此ハ寺ノ文ニ早
 シと思九向シテ定ムキニモ非スアハニ其文ヲ中畧シテ
 法格ノ外ノ風雅ヲ知トナリ去ルハ五セノ詔路モナク假名真
 ノ配モナクニ句長短ノ和子モナキニ統一風雅ノ情ヲ見テ
 此等ヲ辭ノ文鑑トセハ文ニ早ノ家ノ活計ナシナリ去ル
 此式ノ林手庭ニモアレハニヤ一聽内所ノ沙汰ニ及ビ中牧ハ井田
 ノ法ヲ云ル但レハ廻書上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ
 見エタリ然レテ結語ハ姓婦ヨリ不意ニ仰法ノニ子ヲ云ル
 姓婦ハ内々ノ祝詞ノ仰法ハ彼カ常詔ナリト見ルヘシ

歳類

雨居歳

芭蕉庵

あつちとせ暮やにひとのまゝまゝうら
 人まゝふー人まゝふーあまゝいふらふ
 けけし月のあやのあゝのなめらわれい
 るふーやあゝいふらふあゝいふらふ
 かゝる庵のまゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 てまゝとせあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 ぬれさう〜あゝあゝあゝあゝあゝ

任云此題ハ大守ノ辭ヲ借テ向ハ雨ナリ小人ノ独処ナリ

ト朱氏ヲ註モ云ヘリトクまじハ此等ハ隱者ノ常情ニシテ
 或時ハサテ疎トモ或ハ人ヲ懷シム本マリ心神不定ナリ
 ハ頓阿モ凡月ノ情ニ過タリト云好法師ノ歳々ル傳
 誠ニ此等ハ前後ニ羽字ヲ用イテ自己ノ散乱ヲ歳
 首尾ノ文法ラズニキナリ但し此句ハ拙字ノ発句トモ云フ
 キヤト故云羽モ語リ玉リトフ常ニ我師ハけまら云ヘリ

猶恋心歳

ち巴靜

猶く〜い〜ら女この言れ懷き〜い〜い〜い〜い
 うその懐〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

毛浅同敷ハ遠ク箴テ近ク慎サフヤ然リ色ニ遊ヘクテ
色ニ漂フカラストハ肉雖ノ意モ此モ又ナルレ但し正静ニ由
氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス素生ハ濃ノ竹ノ鼻ノ三座ナリ
トワ

新編文鏡

南雪公集

藏書